

## 後撰和歌集注釈 (二)

——卷一春上(22~46)——

工 藤 重 矩

(一九八三年八月一七日 受理)

### 題しらず

22 わがせこに見せむと思し梅花それとも見えす雪のふれゝば

あなたに見せようと思った梅の花は、梅の花とも見えない。白い雪が降っているのだ。

『万葉集』巻八(一四二六)の「吾勢子尔令見常念之梅花其十方不所見雪乃零有者」(山部赤人)と同じ歌である。他に『古今六帖』(第一、雪、赤人)『赤人集』(私家集大成所収13)『人麻呂集』(17)『家持集』(11)『和漢朗詠集』(春、梅、赤人)など。

作者は『万葉集』に拠って、赤人であること疑いないが、平安時代には家持・人麻呂とも考えられていたのであろう。本集が「よみ人しらず」としているのも(21がよみ人しらず)、そのような作者説のゆれによることかもしれない。従って、『万葉集』からの直接の採歌でないことは明白である。但し、承保三年奥書本・中院本は作者を赤人とする。

「せこ」は女から男を言うことばであるが、家持と池主・縄麻呂の贈答歌にも用いられ(三九九六・三九九七、四〇〇七・四〇〇九など)、眞淵は

『万葉考別記』で「男どちの互に吾兄子といふは貴み親めるなり」といい、また「古より哥には男にして女の言をも、女にして男の言をもいへること、たまたまはあり」とも言う。平安時代の男同志の贈答歌において、一方が女の立場になって、恋歌めかしてやりとりすることはごく普通のことであるが、家持・池主の贈答などはその先蹤であろう。この赤人の歌は『万葉集』においても詠歌事情は不明であるから、しかとは言えぬが、眞淵の説くような表現法を考慮すれば、男でありながら女の立場に身をおきなして詠んだ歌なのであろう。

『万葉集』の理解としてはそういうことであろうが、『後撰集』の歌としては、「よみ人しらず」に従えば、男(赤人)から男へ贈ったものと考えする必要はない。「せこ」の通常の用法は、女から男をいうのであるから、この歌も女の歌と理解するのがよい。承保奥書本・中院本等が作者を赤人とするのは、後人の所為であろうから——もし赤人が原形だとすれば、平安時代においても『和漢朗詠集』で赤人としてしているほどの作者を、よみ人しらずと改変することはないであろう——『後撰集』としては、作者が男(赤人であれ家持・人麻呂であれ)ということには全

く拘わる必要はない。

歌の心は明白である。梅と雪のこと、小島憲之『古今集以前』に詳しい(↓2)。「万葉集」巻十(二三三四)「梅花それとも見えず降る雪のいちしろけむな間使ひやらば」の序詞部分、『古今集』冬(三三三四)「梅花それとも見えず久方のあまぎる雪のなべてふれば」(左注、人丸)などと同想。この類歌二首、既に『万葉集』の注釈に指摘がある。

## 23 きて見べき人もあらしなわがやどの梅のはつ花おりつくしてん

来て見るであろう人もあるまいよ。私の家の梅の初花はすっかり手折ってしまおう。

『家持集』(I46)に第二句「人もあらしを」とする。『万葉集』巻十(二三三八)「来可視人毛不有外吾家有梅之早花落十方吉」とあり、これは『家持集』(I21)「人麻呂集」(I162)にも採られている。『家持集』や『人麻呂集』は作者を考える上では、ほとんど信ずるに足りない家集なので、『後撰集』のこの歌の作者も不明である。『新抄』は、「『万葉集』の歌をいささか引きなほして載せられたるなるべし」と言うが、『万葉集』に拠った別の歌とすべきであろう。あるいは、伝えられてゆくうちに詞句に変化を生じたのであるかもしれない。

「見べき」は古い接続法。平安時代は「見るべき」と連体形が普通になる。「はつはな」はその年初めて咲いた花。『万葉集』には九例、八代集では『古今集』『後撰集』『金葉集』各二例、他にはない。平安時代にはやや古い語というべきか。

澤瀉久孝『万葉集注釈』は二三三八の項で「我がやどの梅咲きたりと告げやらば来とふに似たり散りぬともよし」(六・一〇一一)を心にもつ

ての作か、という。本集二三番も贈答歌であれば、本意は、見に来てほしいということであろう。

梅の枝を折るのは、よくよく目近に鑑賞せんが為である。『古今集』春上(三七)「よそにのみあはれとぞみし梅の花あかぬ色香は折りてなりけり」(素性)など。『古今集』春下(二〇〇)「まつ人も来ぬものゆゑに鶯のなきつる枝を折りてけるかな」は類想の歌。同春下(七四)「梅花ちらばちらなむちらずとてふるさと人のきてもみなくに」(惟喬親王)は『万葉集』二三三八に近い。

## 24 ことならば折つくしてむ梅花わがまつ人のきても見なくに

同じ一人で見るとなれば、この梅の花はすっかり折ってしまおう。私の待つ人は来て見ることもないものを。

「ことならば」は古くから『古今集』の注釈の歴史の中で様々に論じられている。同ジクハの意とする説、此ノ如クナラバとする説、常ニ異ナラバとする説などがあり、訓みも「こと」「ごと」の清濁二様に訓まれている(竹岡正夫『古今和歌集全評釈』春下82参照)。この語の語構成的理解は必しも明らかではなく、現在は、橋本進吉『上代語の研究』の説が通説として行われ、「同じくならば」の意とされているが、山口堯二「ことめでは・ことならば考―コト(事)の暗示性―」(『論集日本文学・日本語―上代―角川書店 昭53)や山口佳紀「ゴト(如)の意味―比況入ゴト(シ)の成立―」(『国語国文51巻10号』)は橋本説に異見を提出している。

『万葉集』『日本書紀』に遡っての、語源的理解としての当否の検討は、能くなしうところではないのでいまは措く。上代においては必ず

「こと十動詞十ば」という形をとり、「ことならば」は存在しない。平安時代になると逆に「こと動詞ば」の形は全く存在しなくなり、「ことならば」となる。このような分布を示す言葉を同一平面で扱うことには無理があるのではなからうか。上代の「こと動詞ば」の「こと」と、中古の「ことならば」の「こと」とが同語ということも、なお証明されていないと言うべく、山口佳紀氏の橋本説批判は十分の合理性をもつ。

山口佳紀氏は、平安朝の「ことならば」の多くは、形式においては、上代の「こと……ば」を承けるが、内容においては「ことことは」の方に近いと言えそうであると言ひ、「こと……ば」は「ことことは」とは違った内容表現する形式であったのが、両者とも、現状を不可避と捉えながらも、別の事態を望むという点で共通する所から、混同されるようになったかと言う。ただ、氏は「ことならば」を上代の「ことことは」(万・八九七)を継承するもので、自棄的表現であるとされているが、この言ひ方は説得的でない。

平安時代の「ことならば」の語構成的意義は、今なお不明と言わざるをえないが、諸例を通して見るとき、教長・顯昭の「おなじくはと云詞也」や、あるいは栄雅の「かくのごとくならば」という解釈で、一往は意は通ずるのである。そして、同じくはというも、かくの如くならばというも、認識の内容としてはさほど異なるものではない。実現不可能のことを想定して、できることなら、そうしたい、そうあってほしいという希望の表現形式である。ただ、「同じことなら」「こんなことなら」「できることなら」では、表現のニュアンス・内容にはずいぶん違いがあり、これは語義として分析的に決定しなければならないことである。その意味では解釈の根拠を持たないことになるが、今は古注以来の「同じくは」の意として解した。この語はなお検討を要する。

共に梅花を見はやすべき人が来ない。待っているのに来ない。来るのであれば、手折らずにおくのだが。見に来ないのだから、同じ一人で見るとなら、近々と色も香ももてはやしうるようにすつかり折り取って、一枝も残さず一人じめしてしまおう——梅花を見に来るのなら今のうちですよ、私はあなたを待っているのですから——というほどの意であろう。

前歌23と全く同想の歌である。類歌も前歌の項参照。

25 吹風にちらずもあら南ゝめの花わが狩衣ひとよやどさむ

吹く風に散らないでいてほしい、梅の花よ、(花の香が移るよう)わが狩衣を一夜宿らせようと思う。

『古今六帖』(第五、狩衣)では第三句「桜花」とする。

『新抄』に「梅花の風にちるを見て、今宵ばかりだに散らずもあれかし、木の下に宿りてわが狩衣に香をしめんと思へばといふにて」というごとくで、おそらく野遊びに出るの詠であろう。『万葉集』巻八(一四二四)「春の野にすみれつみにとこし我ぞ野をなつかしみ一夜ねにける」の俤がある。

衣に梅の香を移すのは散つての後の形見としようとの心であらうか。『古今集』春上(四六)「梅が香を袖にうつしてとどめてば春はすぐともかたみならまし」の趣き。恋の歌とみれば、女の許に一夜宿らんとする男の歌ともみえる。前歌23が、待人の来ぬ歌であったのに対して、これは梅の色香をめめて宿ろうというのである。

26 わがやどの梅のはつ花ひるは雪よるは月とも見えまがふ哉

私の家の梅の初花は、昼間は雪と、夜は月の光と見分がつかなく見えることだ。

白梅と雪のとりあわせ、『万葉集』八二三・八三九など、『古今集』六・七・三三五・三三六・三三七などに見える。日本漢詩においても、『菅家文草』に「雪片花顔一般、上番梅櫻待追飲」（春雪映早梅）などにみられる。（↓2・22）

白梅と月光のとりあわせ、『古今集』春上（四〇）「月夜にはそれとも見えず梅の花かをたづねてぞ知るべかりける」（躬恒）や『菅家文草』（三七六）「随處有梅惣可憐、不如独立月明前」（翫梅花）などがある。

『初学抄』似物の項に「月はひるに、霜、雪、水、鏡」「雪は花、白雲、シラガ、月、浪、ユフ、霜」「花は錦、雲、雪、ユフ、浪」ともあるごとく、雪月花は互に似るものとして見立てられる関係にある。白い花を雪月に見立てること、『後撰集』（夏、一五五）「時わかず月か雪かとみるまでにかぎねのままに咲ける卵の花」などもある。

「はつ花」はこの春初めて咲いた花であり、はつ花が雪と見えまがうというのは、季節的にも雪中梅の趣きである。『万葉集』での「早花」（三三二八）は「ハツハナ」と訓まれているが、『菅家文草』の「春雪映早梅」などは、和歌的には、梅の早花（はやな）ということになる。

この歌、雪月花をみなとりそろえたところが、作者としてはねらいであらう。

## 27 梅花よそながら見むわぎもこがとがむ許のかにもこそしめ

梅の花は離れたままで見よう。近づいて、私の妻が不審がるほどの香が衣に染みついてはこまる。

『拾遺集』春上（二七）に同歌がよみ人しらずで採られている。

「よそながら見む」は、離れたままで、直接に手折ったりせずに見ること。本当なら、「よそにのみあはれとぞ見し梅の花あかぬ色香は折りてなりけり」（古今集、春上、素性）だから、手折りたいところだが、梅は移り香に匂いやすく「折りつれば袖こそにはへ梅の花」（古今集、春上、不知）、それを他の女の移り香かと、とがめられてはこまるとの心（↓42）。『標注』『新抄』等が指摘する『古今集』春上（三五、不知）「梅の花たちよるばかりありしより人のとがむる香にぞしみける」を念頭において、そうなつてはこまるというのである。

「わぎもこ」は『万葉集』には約一五〇例と多く用いられた語だが、『古今集』には一例（墨滅歌）、『後撰集』は二例、『拾遺集』は八例のうち四例は万葉集の歌、『後拾遺集』三例というように、平安時代に入ってからあまり用いられなくなった。『拾遺集』に人丸の歌として五例が見られるが、十世紀後半の頃に、万葉語として復活使用されたのであらう。本集、この前後『万葉集』関係の歌が散見する。配列の趣向として、万葉風の歌という意識があるか。

素性法師

## 28 むめの花おればこぼれぬわが袖に、ほひがうつせ家づとにせん

梅の花は手折ると花びらがこぼれ散ってしまう。私の袖にその匂う香りを移せ。家へのみやげにしよう。

『素性集』（一23）は下句「にはひはうつせ人のしるべく」とする。『古今六帖』（第六、梅、素性）は後撰に同じ。

「こぼる」を花が散る意に用いる例は、「たがために明日は残さむ桜

花こぼれて匂へ今日の形見に」(新古今集、春下、一五〇、元輔)があるが、珍しい用法。「あさみどり野辺の霞はつづめどもこぼれてにほふ花桜かな」(拾遺集、春上、四〇。菅家万葉にも)は、包むに對してこぼるを用いており、霞の間から見えるさまで、散る意ではない。『新抄』は「手折つれば、はら／＼と袖に散りかゝりてなほ其袖にもたまらずなりゆくを、こぼれぬとはいはれたりと聞ゆ」とするが、まわりくどい。コボル・コボスは『名義抄』ではいくつかの漢字の訓としてみえるが、ここでは覆・飄などの字義に近い。花の散りかたとしては、一片二片とはらりと散るのではなく、ひっくりかえすがごとくに、ザッと散るさまを表現している。満開の梅の枝を折ると、そのはずみに、一度に白い花びらが雪を覆すごとくに、水を覆すごとくに散るのである。『伊勢物語』八五段正月に小野の親王を訪う段、「雪こぼすがごと降りてひねもすにやまず」や、『末摘花』の「松の木のおのれ起きかへりて、さここぼる雪も」などにおけるさま、特に『源氏物語』末摘花の例はイメージとして類似する。また「秋の野は折べき花もなかりけりこぼれてきえん露の惜しさに」(後拾遺集、秋上、三〇九、源親範)の、露がこぼれるさまも思ひあわせれば、「梅の花折ればこぼれぬ」の、こぼるの使い方、なかなかあざやかである。

「にほひが」は香りに同じ。『新抄』に「にほひがは匂ひ香なりと、為家卿の抄に見えたりと季吟法印は記されたれど」(抄ニハ「匂ひ香今は読むまじき由とぞ為家御義」トアリ)、今ある為家卿ノ抄には見えず、されど意は違はず、竹川巻に、げにいと若うなまめかしきさましてうちふるまひたまへるにほひがなど、よの常ならず云々とみえて、にほひ香はにほふ香をいふと鈴屋大人もいはれたり、此にほひがといふ詞、いとめづらしきゆゑに心得がたきこちすめれど、さりとて家集の方にては、

歌ざまいたくおとるべし、契沖阿闍梨もにほひはの誤かといはれたれど、なほ一首の勢おとるさまなり」という。用例は右の他に『能宣集』(I 108)「にほひがをわがはや知らむ梅の花色ことならず雪のふれれば」や『輔親集』(I 89)「にほひがは君にますべきあらねどもおりてぞみするやどの梅が枝」がある。共に素性の歌による用語。従って、『新抄』の言う所は正しく、家集の「にほひは」はかの誤であろう。「家づと」は家への土産。つとは『名義抄』に賂賒贄などの字を検しうる。賂には「ウク、ニヘ、ツト、以財枉法相謝」とあり、『邦訳日葡辞書』では「Iyezuto Miague. 携えてくる何かの贈物」とある。『万葉集』には「涙つと」「山つと」の語もあり、これは涙・山からのつとである。該歌にも「山つと」の異同が天福本朱書入・雲州本などにある。

一首の意は、梅花を家づとにしようと思うが、折れば花はこぼれ散つてしまふ、だからせめてその香を袖にうつして家づとしようとの意。『万葉集』(一六四四)「引きよちて折らば散るべみ梅の花袖にこきれつしまばしむとも」はよく似ているが、花びらを袖にしごき取って持ち帰ろうという所が、いかにも現実的で、その点素性の歌は、梅—香—袖の移り香という平安時代的觀念化が窺われる。同じ素性の「見てのみや人に語らん桜花手ごとに折りて家づとにせん」(古今集、春上、五五)は同趣の歌。

おとこにつきてはかにうつりて      よみ人しらす

29 心もておるかはあやな梅花かをとめてだにとふ人のなき

男に従つて、他所に移つて、

自分から梅の枝を折ることがありましようか、それなのに、わけのわからないこと。(梅の花は見えないといつても、香りは隠れないのに)その香りをもとめてさえも、訪れて来る人がいないこと。

『新抄』を引く。「我心として外へうつりし事は、我心としてうつりしにはあらず、男につきてかくうつりたるは、せんかたなきことなるに、たとひ我をばうとむとも、梅花の香だに人のとひこぬはわけもなきうらめしきことかなといふ意と聞え、為家卿の抄も此意なりと、季吟法印の抄には記されたり(下略)」

一首の意はほぼこれでよいが、初句の「をる」は、『正義』が「此折は居る心にそへたりとおぼゆ」というとおり、掛詞とすべきであろう。

「折」の意としては、花を折るとは女性を手折る喩えに用いられるが、ここは、望んで折られたのではないと受身に言うべきを、能動態に言ったものであろう。梅花は枝を折られてもはや花を見るべくもないが、目に見える花が無いからといって、訪れてこないのは、花を愛する心が無いのではないか、色こそ見えね、香は隠れようもないのだから、その香のあとを尋ねて訪い来てほしい、それなのにそれさえもしないと、おそらくは男が何か恨みがましく女の二心をなじった歌に対する返歌であるうと察せられる。

「香をとむ」とは、香を求め尋ねること。「迹トム、タツヌ」「趣トム、モトム、フム、タツヌ」(名義抄)や、『拾遺集』(春上、一六、躬恒)「香をとめて誰れ折らざらむ梅の花あやなし霞たちなくしそ」『後撰集』(夏、一八八、不知)「夏の夜に恋しき人のかをとめば花橘ぞしるべなりける」『後拾遺集』(夏、二二〇、惠慶)「香をとめてとふ人あるを菖蒲草あやしく駒のすさめざりけり」など。香は道しるべでもある。

「あやなし」は理に適わないの意で、自分の意志で男に従って移った

のなら、訪ねて来なくても道理だが、自分の意志ではない—女に責任はないのに訪ねて来ないのは、道理にはずれる。それが「あやなし」であり、男の非難に対して、逆に女の方が男の意気地なきをなじったもの。

年をへて心かけたる女の、ことし許をだにまちくらせといひけるが、又のとしもつれなかりければ

30 人心うさこそまされはるたてばとまらずきゆるゆきかくれなん

長年にわたって思いをかけていた女で、せめて今年だけでも待つて過せと言ったのが、次の年も冷淡だったので、

人の心はつれなさばかりがひどくなる。春になると留まらずに消える雪のように、行き隠れてしまおう。

詞書、二荒山本・片仮名本・堀河本は「題しらず」である。

「人心」は人の心で、三人称的言い方であるが、平安和歌の贈答歌における「人」は、具体的には相手である人をさす。「あなた」と言うべきところを「人」と婉曲に表現するのである。

三四句は「ゆき」(雪・行)の掛詞による序詞であるが、詠作は正月初めの頃であろうから、その時節にあわせた使用である。「ふるからにとまらずきゆる雪よりははかなき人を何にたとへん」(玉葉集、雑四、天曆御製)は類似の措辞。

雪—行の掛詞。「世の中の憂けくにあきぬ奥山の木の葉に降れるゆきやけなまし」(古今集、雑下、九五四、不知)「うき世にはゆきかくれなでかきくもりふるは思ひのほかにもあるかな」(拾遺集、雑上、五〇四、元輔)「あら玉の年ふりつもる山里にゆきあかれぬは我身なりけり」(躬恒集Ⅳ 87)

「行き隠る」は隠遁すること。「いづかたにゆきかくれなん世中に身のあればこそ人もつられけ」(拾遺集、恋五、九三〇、不知)や、前掲の「ゆききゆ」「ゆきあかる」も隠遁の意である。

## 題しらず

## 31 梅花かをふきかくる春風に心をそめば人やとがめむ

梅の花の香を吹きかける春風で心に香をしみこませるならば、人が(その香を)不審がるであろうか。

『古今六帖』(第五、雑の衣)、第二句「かを吹つくる」四句「衣をそめば」とあって、『新抄』は「人やとがめんとあるには衣の方似つかはしきやうなり」と、衣の方がまさるという。堀河本は衣とある。「心をそむ」の例、「紅にそめし心もたのまれず人をあくにはうつるてふなり」(古今集、誹諧歌、一〇四四、不知)「世の中の人に心をそめしかば草葉にいろも見えじと思ふ」(拾遺集、雑秋、一一一七、貫之)「桜色に我身のうちはなりぬなり心にしみて花を惜しめば」(拾遺集、春、五三、不知)など。そむは色について言うのが普通であるが、香りについても用いること、16番に既述。

「吹きかく」は、『国歌大観』で中世和歌に三例を見出す。雲を月に(玉葉・新後拾遺)、雪を簾に(風雅)吹き掛くと詠む。『枕草子』二二三段に「風のいたう吹きて横ざまに雪を吹きかくれば」とあるのが、散文ではあるがやや近い例である。

春風が梅の香を花見る人に吹きかけてゆく、その花の香に心も陶然と酔わせると、袖は移り香に匂わなくても、人が不審に思うだろうかとの意。本集の27番、『古今集』三五などは、梅の移り香を人がとがめると

詠むのに対し、これは、衣ではなく、心とするところが作者の興趣の存する所であろう。心は他人には見えないから、あくまで香をしみこませたいが、それでも人は見とがめるだろうか、きがかりなのである。

## 32 春雨のふらばの山にまじり南梅の花がさありといふなり

もし春雨が降るならば、野山に分け入ってしまおう。梅の花笠があるという話だから、かえって野山に入ってしまったら、常識の意表をついた歌。野の梅を見に出ようとして、ある日既に道にあって、雨が降り出しそうで、人々が野に行くことをためらった際にでもよんだものであろうか。

『古今六帖』(第一、雨、貫之)第二句「山辺に」。『貫之集』になし。もし雨が降るなら、常識としては、野遊びはできないのだが、梅の花笠があるという話だから、かえって野山に入ってしまったら、常識の意表をついた歌。野の梅を見に出ようとして、ある日既に道にあって、雨が降り出しそうで、人々が野に行くことをためらった際にでもよんだものであろうか。

上句は「いざ今日は春の山辺にまじりなんくなばなげの花のかげかは」(古今集、春下、素性)に拠る措辞。「梅の花笠」は『古今集』神遊歌に「青柳をきたいとによりて鶯のぬふてふ笠は梅の花笠」とあり、春上「鶯の笠にぬふてふ梅の花」(東三条左大臣)と詠まれている。これらを念頭においての作。

22 から続いた梅の歌が32で一往終る。梅の配列をたどってその意味を考えてみる。22雪中梅23初花で、咲きはじめたばかりの梅。2324はその花を人が見に来ない。25は狩衣を宿すべく人が来る。2425は対の内容。26は雪月の見立て、視覚的に詠じ、27から香を嗅覚的に詠ずる。やはり対をなす。2829は同じ香を詠む中で、「折れば」「折るかは」と「折」で組をなす。29は男から離れて行った女の歌であり、30は女から冷淡に

あしらわれた男が「ゆきかくれ」ようかという歌。いわば29の物語的展開として、ここに梅とは関係のない、序詞の中で「春立たば留まらずきゆる雪」というだけの歌が、この位置におかれたのであろう。31 32は春風と春雨の対比。大体、二首で対をなしながら、鎖的に接続しているといえよう。

### 33 かきくらし雪はふりつゝしかすがにわが家のそのに鶯ぞなく

天を一面昏くして雪はおりおり降って、とはいえすがに、(春なので)私の家の苑で鶯が鳴くことだ。

『万葉集』巻八(一四四一)「打霧之雪者零乍然為我二吾宅乃苑尔鶯鳴裳」(家持)の異伝の歌である。『拾遺集』春(11)に同じく家持の作として採られる。『古今六帖』(第一、のこりの雪、家持)第一句「打きらし」第五句「鶯ぞなく」として、また同じく第六・鶯に「打きらし……鳴きつ」で見える。『秀歌大体』は「打きらし……鶯ぞなく」。『夫木抄』巻二(鶯)にも。『家持集』にはなし。

「かきくらし」は空を暗くしての意。「かきくらしふる白雪の」(古今集、恋二、忠岑)など。平安時代、うちきらしの用例はごく少なく、「霧」という動詞にもなじみがないので、かきくらしと時代的変容を受けたのであろう。平安時代的変容ということでは「鶯ぞなく」も同じであろう。

『万葉集』の「吾宅」はワギへと訓まれているが、『後撰集』の「わが家」は「わかいへ(系)」の仮名書があるので(二荒山本・片仮名本・雲州本など)、わがいへとよむのがよい。27に述べたが、ワギモコも平安時代には少い。ワギへもそのことと同じ現象である。

「その」は『倭名抄』に「園圃 四声字苑云園圃所以城養禽獸也、狻浦二音和名曾乃云曾乃布」とあり、「ならされぬみそのうりとしりながら」(後拾遺集、雑二、九四八、義孝)ともあるので、平安時代は果樹園・畑として理解されていたようである。

この歌、家持の歌がどのような経路でか、よみ人しらずで伝わり、伝わるうちに平安時代的変化をとげたものであろう。『万葉集』からの直接的採用ではないであろう。

### 34 谷さむいまだすだゝぬ鶯のなくこゑわかみ人のすさめぬ

谷が寒いので未だ巣立たない鶯の、その鳴く声が幼いので、人があるてはやさないことよ。

『新抄』を引く。「二つのみ」は、谷が寒さに、鳴声が若さといふ意なり。すさめぬは、見る物にていはば、目にもかかぬといはんが如く、聞く物ならば、耳にもとめぬといはんが如し。俗言に食着シヤキせぬといふに近し。賞翫せぬ意なり。古今春上山高み人もすさめぬ桜花いたくなわびそれれ見はやさん、同雑上大あらきのもりの下草老ぬれば駒もすさめずかる人もなし、など皆同じ。

一首の意は、谷が寒さに、春は来ても、いまだ巣立得ずして、なく声がさなさに、誰ありて、耳にとめて、鶯が鳴よと賞翫する人もなしとなるべし。又思ふに、此歌も上にもいへるが如く用語のものも末句に歎息の意ありて、人のすさめぬよといふに近きやうなり。然るときは、ただ鶯の上をよみたる歌とも思はれず。もしは、恋歌などにて、我がいまだ人なみ／＼にもあらぬ身ゆゑに、我いふ事などを、人の耳にもとめざるよと、我身をなげく意などにはあらじか。



師云、件の説々にてよく聞えたれど、又いさか思ふに、こゑわかみといふは、古今集〔春上、棟梁〕春たてど花もにはぬ山里は物うかるねに驚ぞなくとあると、合せて考ふるに、驚のこゑの、いまだ心よく花やかにはなかずして、俗に谷わたりといひて、ちちくといふやうに、うひくしくなくをいふにてもあるべし。ものうかるねも、いまだころよくはなざるを、しかいへるやうに聞ゆればなり。こは、大平が新説なり。とる人の心々によるべしといはれたり。」

右に付け加えるべきことはほとんどない。歌意に人事を含ませるべきかどうかは、何とも言えない。『古今集』の「山高み」「大荒木の」は一読人事を含むこと明らかであるが、この歌はそれほどには明瞭ではない。鳴く声が若いとは、驚のこととしては、本居大平の説の通りであろう。

また、常識ということでか、『新抄』は「谷寒み」について注していないので、補う。驚が谷から出てくることは、『古今集』春上(一四、千里)に「驚の谷より出づる声なくば」とあり、これは『余材抄』が指摘するごとく、『詩経』伐木「出自幽谷、遷于喬木」による。この鳥は『毛伝』では驚とは限定していないが、『白氏文集』巻五五「賀燕飛和出谷驚」とあり(金子彦二郎)、本朝においては、昌泰二年(899)正月二十一日内宴に「驚出谷」の題で作詩があり(紀略)、千里の和歌もこのような作詩と無関係ではないであろう。『拾遺集』春(八、源順)「水だにとまらぬ春の谷風にまだうちとけぬ驚のこゑ」も、谷の驚のわかい声を詠んだもの。

35 驚のなきつるこゑにさそはれて花のもとにぞ我はきにける

驚の鳴いた声にさそわれて、いつのまにか、花の下に私は来てしまったのだなあ。

『千里集』(2)の句題「驚声誘引来花下」は『白氏文集』巻十八「春江」による(金子彦二郎)。「古今六帖」(第六、驚、作者不記)に、また『赤人集』(14)にもある。

千里の句題和歌の一であり『白氏文集』をそのまま和歌にひき移したものである。ただ「我」を加えて、行為者をはっきりさせた。漢詩に対する解釈である。

『新抄』は「重之集」(82)「うぐひすの声によばれてうちくればものいはぬ花も人まねきけり」を指摘している。これは、千里の歌に、更に李広の故事である「桃李不言下自成蹊」(漢書・史記)を重ねあわせている。

36 花だにもまださかなくに驚のなくひとこゑを春とおもはむ

花さえもまだ咲かないのに、驚のなく一声を春の来たしるしと思おう。

「花だにも」は、作者の意識では花が春のしるしであり、驚は副次的である。しかしながら、一般的には春の到来は驚によって告げられるとするのが、平安時代の常識である。『古今集』の例「春来ぬと人は言へども驚のなかぬかぎりはあらじと思ふ」(忠岑)や「驚の谷より出づる声なくば春来ることを誰かしらまし」(千里)など。また、『標注』『新抄』が掲げる「春やとき花やおそきと聞きわかん驚だにもなかずもあるかな」(藤原言直)もやはり、春の判定基準を驚にしている。花はまだ咲かないけれど、驚がなければやはり春だから、その一声を春と思お

うとの意であろう。一般には春のしるしである鶯を、しかたなしにという体で、春と思おうという所がこの歌のおもしろさである。

鶯の一声とは珍しい用い方である。八代集では四例（後撰、後拾遺23、金葉657・872）である。一声は郭公について用いられるのが普通で、元来は詩語であるという（小島憲之『古今集以前』）。その応用であろう。

第五句「春と思はむ」を、二荒山本・片仮名本は「春と思ふらん」とする。その本文だと、他人のことを思いやっている歌になる。

『玉葉集』春上「宝治の百首の歌奉りけるに 朝鶯 鷹司院按察 花もまだにほはぬころの朝な／＼鳴けや鶯春と思はむ」は、本歌取り。

### 37 君がため山田のさはにゑぐつむとぬれにし袖は今もかはかず

あなたのために、山田の沢でえぐを採もうとして濡れてしまった袖は、今でもかわきません。

『古今六帖』（第三、沢）「ほせど乾かず」とあり、後撰集鳥丸切の本文に一致する。『万葉集』卷十（一八三九）「為君山田之沢恵具採跡雪消之水尔装裾所沾」は下句に違いがある。『家持集』『赤人集』にも『万葉集』と同じ形で見える。『万葉集』の形であったものが、伝承されて行くうちに平安風に変化したものであろう。

ゑぐは実体がよくわからない。古来、芹の一種とか、会供と書いて若菜の総称とか、黒くわいであるとかに説明されている。古くは芹説が、近世以降はくわい説が有力である。蔵中スミ氏は「『ゑぐ』考」（水門・昭42）において、実体は黒くわい（藺に似た草の根に生ずる芋様のもの）で、ゑぐはその方言であるかとされ、それが平安時代になって、曾根好忠が、雪消えばゑぐのわかなもつむべきに春さへはれぬみ山辺の里

（金葉集9・詞花集5）と詠んだことから、「ゑぐの若菜」とよむ歌が続出し、黒くわいではなく、若菜と理解され、更に「会供の若菜」とも理解されたのだとされる。時代によって理解に相違があることは、氏の言われる通りであろう。平安時代は、芋類のくわいではなく、草類の一つとして理解されていたことも、「をかみ川浮江にはゆるゑぐうれを」（夫木、若菜、俊頼）「うら若みつめとたまらぬゑぐの葉を」（夫木、若菜、後徳大寺左大臣）などで明らかである。従って、『後撰集』のこの例も、若菜として理解するのがよいだろう。「会供の若菜」であるのか、「ゑぐ」という名の草」であるのか、今一つはつきりしない。「七種の数ならねどもはるの野にゑぐの若菜もつみはのこさじ」（夫木、若菜、信実）によれば、「ゑぐ」とは春の七種以外の草の個有名詞と聞える。これに『万葉集』の「山沢ゑぐ」（二七六〇）などの言い方を重ねれば、個有名詞（草名）と考えられていたのであろう。なお、『万葉集』のゑぐは、蔵中論文においても、黒くわい説が証明されたとは言いがたい。

『新抄』は「一首の意は、古今春上に、君がため春の野に出てわかなつむ我が衣手に雪は降りつゝといふ歌の御意に似て、其摘みたる時の勞をつよくいへるは、則ち君がためにと思ふ心の深きよしなり」とする。

『万葉集』（一八三九）の理解としてなら、右の説明はよくあてはまるが、『後撰集』は「今もかはかず」という所が肝要で、摘む時の勞を言うのではなく、摘んでその後、願のかなぬ嘆きの歌。恋人への思いが適えられずに、今も涙で袖が乾かないの意である。『後撰集』恋一（七二四）「からうしてあへりける女に、つつむこと侍て、又えあはず侍ければつかはしける 兼輔朝臣 相坂の木の下つゆにぬれしよりわが衣手は今もかはかず」や『拾遺集』恋二（七六〇）「ふるく物いひ侍ける人に元輔 草隠れかれにし水はぬるくとも結びし袖は今もかはかず」などと

見合せて理解すべき歌の様。芹摘み説話の趣である。

あひしりて侍ける人の家にまかれりけるに、梅の木侍けり、この花さきなむ時かならずせうそこせむといひ侍けるを、となく侍ければ

朱雀院の兵部卿のみこ

38 梅花今はさかりになりぬらんだのめし人のをとつれもせぬ

知りあいでありました人の家に参りましたところ、梅の木がありました、(その家の主が)「この花が咲きましたような時にはきつと御連絡申しましよう」と言ったのですが、音沙汰がありませんでしたので、

梅の花は今ほもう花盛りになっていることでしょう。(それなのに)私をあてにさせた人は、声をかけることもしないことよ。

『古今六帖』(第五、おどろかす、作者不記)に第一句「桜花」と。

作者「兵部卿のみこ」について、天福本の勘物は「寛平第五、敦固三品兵部卿、延長四年九月薨」と、宇多皇子の敦固親王をあてている。敦固は延長元年二月には兵部卿に在任しており、四年(926)十二月二十八日に兵部卿で薨じた(貞信公記)から、父宇多天皇の院であった(歴代の後院である)朱雀院を冠して「朱雀院の」と称されたのであり、敦固をあてるのは正しい。(柿本獎「解釈断章」(一)参照)

敦固前後の兵部卿を検すると、寛平四年(892)在任の惟恒(文徳皇子)が延喜四年(904)に兵部卿で薨じ、延喜六年閏十二月十七日貞保(清和皇子)在任中であり、この貞保は延喜二〇年式部卿是忠親薨後式部卿となっている。親王の官職としては、式部、中務、兵部の順であるが、中務卿は延喜十六年敦慶親王在任であり、敦慶は延長二年(924)に

も中務卿のままであるから、貞保は中務卿をとびこえて式部卿に就いたのである。この貞保の後任が敦固であり、敦固の後任は延長五年兵部卿で薨じた克明親王(醍醐皇子)であり、その後任は元良親王(陽成皇子)であるらしく、延長七年十月十四日在任であることが確認でき、天慶六年(943)七月薨ずるまで。その後任は、元良の弟宮元長親王が天慶七年五月三日に任ぜられ、おそらく天徳二年(938)まで続き、その後は有明(醍醐皇子)・章明(同)と続くようである。この贈答の相手は紀長谷雄(延喜十二年三月十日歿)であるから、それ以前で、かつ朱雀院宇多天皇の皇子は敦固親王ただ一人である。「兵部卿」が現官であることはない。ただし、片仮名本は「朱雀院の」がない。その場合は貞保親王・惟恒親王でもありうる。

詞書に「あひしりて侍ける」とはどのような関係かは不明。現存の諸系図では姻戚関係は見当らない。紀長谷雄は宇多皇子齋世親王の学問の師であったので(西宮記)、あるいは敦固も就いて学ぶことがあったかもしれない。

なお、二荒山本では、長谷雄の言葉の部分が「かならずせうそこせよ、まうでこむ、といひて」とあり、親王の言葉の形になっている。いずれにしても、長谷雄の方から消息しなければならぬのは同じであるが、「たのめし人」という歌詞との対応からは、天福本の方がよい。

歌の詞、難語はなく、心も明らかである。「今はくらん」という言い廻し、「春の花今は盛りににはふらむ折りてかざさむ手力もがも」(万葉集、三九六五、家持)「出でてみよいまは霞も立ちぬらん」(後拾遺、春上、2、光朝法師母)など。

「人のおとつれもせぬ」は『古今集』の「三吉野の山の白雪ふみ分て入りにし人のおとつれもせぬ」(327・忠岑)を始め、三三八・九八四、

『後撰集』七一八、『拾遺集』六四四・九七六などに見られる類型的言  
い方である。

返し 紀長谷雄朝臣

39 春雨にいかにも梅やにほふ覧わが見る枝は色もかはらず

返し

春雨でどのように梅は咲いているのでしょうか。私の見る枝はまだ  
色も変わりません。

『古今六帖』（第一、雨、作者不記）「春雨の色変るにや」とある。堀  
河本にはこの歌はなく、38の作者を紀長谷雄とする。

上句の異同、「春雨に色かはるにや」（二荒山・片仮名本）「春雨にいか  
にそむれば」（承保奥書本）「春風に」（抄・新抄）とする。「春風」は近  
世注釈書の本文だから無視してよいであろう（抄は雨イとし、注は雨の方  
で付している）。「そむれば」でも意味は通るが、「れ・め」の誤写と考  
えられる。「いろかはるにや」も、ろ・可、可・耳、者・そ、る・う、  
児・免と誤写の可能性があり、「色変るにやにほふらむ」は言葉として  
落ち着が悪く、第五句と「色変る」が重複するので、天福本の本文に従  
っておくのが無難であろう。

春雨で草木が萌えること、『古今集』の二〇・二五に見える。おそら  
く実際に昨日か今日か春雨が降ったのであろう。兵部卿が、梅の花は盛  
んになっているだろうと言って来たので、兵部卿の宮の庭の梅はその春雨  
で既に咲いているのでしょうかと逆に問い、決して約束は忘れていない  
けれど、私の見る梅はまだ咲いていないので、消息もしないのですとの  
弁解の歌である。

紀長谷雄は、承和十二年（845）生、貞観十八年（876）文章生（字紀  
寛）、更に文章得業生を経て、仁和二年（888）従五位下、寛平三年（891）  
文章博士、五年式部少輔、八年十二月従四位下、九年五月式部大輔、昌  
泰二年（899）右大弁、三年左大弁、延喜二年（902）参議、十年正月権中  
納言、従三位、十一年正中納言、十二年三月十日薨す。六八歳。

春の日、事のついででありてよめる よみ人しらず

40 梅花ちるてふなへに春雨のふりでつくなくうぐひすのこゑ

春のころ、事のついでがあつてよんだ歌、

梅の花が散ると話しているそばから、飛んで出てきては鳴く鶯の声  
であるよ。

『伊勢集』（I 336）に詞書なくて採られている。『古今六帖』第六（う  
ぐひす、はつせを）、また同第一のこりの雪の項にもあるが、これは第  
六鶯の十一首がまぎれ込んだもので、「残の雪」の歌ではない。

作者を『古今六帖』が長谷雄とするのは（はつせをは長谷―泊瀬から  
の誤りであろう）、『後撰集』では二荒山・片仮名本の作者表記なしとす  
る（即ち39の「きのはせを」が40にもあてられる）のと符合する。『伊  
勢集』に採られているのは「ハせを」から「いせ」へと変化したのであ  
ろう。『伊勢集』は甚しく雑駁な集であるから、伊勢が正しいとは考え  
られない。長谷雄かどうかは今一つ確実でない。

詞書、二荒山本・片仮名本は「はるひとのいへにてよめる」と、堀河  
本は「はるひとのいへにありて」とする。天福本系の「春の日の事につい  
でありてよめる」は「春の日」という言い方が不審である。ただ「春」  
でよい所であり、他にもこのような言い方はない。あるいは「はるひと

のいへにて」が「春はるひことのいへにて」↓「春日事のついで」と変化したのかもしれない。

「ちるてふなへに」は落ち着きが悪い。『正義』『抄』『注解』などは「ちるなへに」と同じと考えてか、「てふ」を訳出しない。『新抄』は「てふの詞も、といふの約にて、こゝも異なる事はなけれど、なほ此歌に遣へるさまは、いとかるく、助辞タリトバなどいはんが如く聞ゆ」として、結果的には「ちるなへに」と同じこととして解している。『新抄』が説くような例は、「夢てふものはたのみそめてき」(古今集恋三)などがそれにあたるが、なお「てふ」が「と言う」の実質的意味を持つ場合の方が多い。

「てふなへに」の用例は、『貫之集』に一例を見出す。「元日雪ふれり」の詞書で、「今日生まれ雪の降れば草木も春てふなへに花ぞ咲きける」(1459・新勅撰集春上3)。正月一日の今日に限って雪が降っているのも、もう春が来たというと同時に、雪が花に見えて、草木も、花が咲いた、の意。

「梅の花散るてふなへに」は、梅の花が散る、と言うと同時に、の意で、「ふりてつづ鳴く」に掛かる。この場合の「いう」に実質的意味を持たせるべきかどうかは微妙。貫之の「春てふなへに」と同じように、行為として「言う」の意は認めなくてもよいかもしれない。また一方、行為としての「言う」と考えると、人々が何人が集まっている場で、梅花が散るという話題があったとたんに、鶯が鳴いたとも解しえないでもない。二荒山本などの「人の家にて」を採れば、複数の人々が居たことは明らかで、場に応じた歌としては、そのような理解ができる。

「春雨の」は「ふりてつづ」の「ふり」をいうための枕詞的働きをなすが、その時の実景ともとれる。「ふりで」は「ふりいで」の約言であ

り、「ふり」は接頭語で、実質的意義は「いづ」にある。「ふりいでて鳴く」は普通「声をふりしぼって」と解されているが、疑問。

①紅葉は惜しき錦と見しかども時雨とともにふりいでてぞ来し  
②知られねば身を鶯のふりてつづなきてこそ行け野にも山にも  
③すべらぎの鈴の限りしありければふりいでて行くも惜しからぬかな  
④鹿の音はいくらばかりの紅ぞふりいづるからに山のそむらむ  
①は『後撰集』四五五(忠房)、②は『蜻蛉日記』、③は『元輔集』、④は『大和物語』の例である。『後撰集』に近い時代のものに限った。これらの例は明らかに「出る」の意である。②は身をふりてつづ、そして鳴きて行くのである。④は、鹿の鳴声を染料の紅に見たて、紅だから「振り出づ」(鹿で言えば声を出す)のである。①③は疑問の余地はない。次に『古今集』の例、

思ひいづるときは山の郭公唐紅のふりいでてぞなく(一四八)

紅のふり出でつづなく涙にはたもとのみこそ色まさりけれ(五九八)  
染料の紅の縁語で「ふり出づ」と用いているが、一四八の「唐紅の」は枕詞で、かつ右の例からも「出づ」の内容は涙・声とは限らないので、声をふりしぼってと訳するのは疑問。試案を述べれば、郭公が山から出て来ての意であろうと思う。これを本歌とした「郭公ふりいでて鳴け思ひいづるときはの森の五月雨の空」(続拾遺四)も、出て来ての意とみえる。「鈴鹿山あけ方近き天の戸をふりいでてなく郭公かな」(続千載御雅有)これは本歌取といえるかどうか微妙だが、一四八の影響はある。これも天の戸を出て来ての意である。『古今集』『続拾遺集』『続千載集』の例、いづれも山郭公が里に出て来ることをいう。

五九八は、紅の涙をぼろ／＼出しながら泣くさまである。「ふりいでて」という語自体に「ふりしぼって」というような悲痛な感覚はない。

涙が「紅」と結びついたときに「血涙」のイメージを生じて、「ふりし  
ばって」と意識してもよい文脈となる。(竹岡正夫『全評釈』参照)

さて、40の「ふりいで」は従って、鳴声ではなく、鶯が出て来るさま  
と解すべきであろう。鶯が「出」という語と結びつきやすいのは、34で  
述べたように「谷より出づる」という觀念があるからで、山郭公が里に  
出てくるのと一対である。このこと、なお別稿を用意する。

散る花に鳴くうぐいすは、花を惜しんで鳴く。『古今集』一〇五く一  
一〇の歌がそれである。「ちる花のなくにしとまるものならばわれ鶯に  
おとらましやは」(107治子)など。本集でも、梅の花が散るといって、  
さっそく鶯がやって来て、散る花を留めようと鳴くというのである。

詞書の「事のついでありて」の具体的内容が分らないので、どのよう  
な寓意があるのか、はつきりしない。春、梅花散ると言えば、任官に漏  
れたのもあろうか。愁訴の歌かとも聞えるが、なお不明。

工 藤 重 矩

41 かよひすみ侍ける人の家のまへなる柳を思やりて みつね  
いもが家のはひいりにたてるあをやぎに今やなくらむ鶯の声

通いすんでいました人の家の前にある柳を想像して、

妻の家の門口に立っている青柳に、今はもう鳴いているだろうか、  
うぐいすの声は。

『躬恒集』(IV 357・西本願寺本)は詞書「しのびてかよひはべりけるひ  
とのいへのやなぎを思ひやりて」とあり、I 106(書院部本)には「かたへ  
はところ／＼なり」とあり、前後が屏風歌なのでこれも屏風歌としての  
配置である。『古今六帖』(第二、家、躬恒)にも。

「かよひすみ」は結婚状態にあること。歌詞の「いも」に応ずる。

「はひいり」は這入で、門の入口という(僻家抄)。「新抄」は宣長の  
『古事記伝』を引いて、門より舎屋<sup>+</sup>内に入るまでの間の庭とする。

「今や／＼らむ」の言いまわし、『古今集』四・二一八などがあり、  
『万葉集』にも「かはづ鳴く甘南備川にかけ見えて今かさくらむ山吹の  
花」(一四三五)「足利の山谷越えてのづかさには今は鳴らむうぐひすの  
声」(三九一五)他にも二一八・一七三四などがある。

柳と鶯のとりあわせも『万葉集』以来のことと、「うちなびく春立ち  
ぬらし吾門の柳のうれに鶯鳴きつ」(二八一九)は、門柳の鶯という点で  
同じである。一首全体、『万葉集』の歌の趣きが感じられる。40は梅の  
鶯、41は青柳の鶯。

この歌、以前に通っていた女の家の柳を想像しての詠であるが、その  
女に贈ったのであれば、柳の鶯を聞きたい、即ち、もう一度訪れたいと  
の意志を表わした歌となろう。

42 松のもとにこれかれ侍て、花を見やりて 坂上是則  
ふか緑ときはの松の影にゐてうつろふ花をよそにこそ見れ

松の下にあれこれの人々がいて、花をながめて、

濃い緑の変ることのない松の蔭に坐って、散ってゆく花を自分とは  
関わりのない物として見ることだ。

『是則集』(8)は『後撰集』からの採取であろう。『古今六帖』(第  
六、松、作者不記)にも。

躬恒の大井川行幸和歌、入江の松の題で「ふかみどり入江の松も年ふ  
ればかげさへともにおいにけるかな」(I 48)は用語が似る。松の蔭と  
いうことは「万代を松にぞ君を祝ひつる千年の蔭にすまむと思へば」

〔古今集、賀、素性〕などのように、庇護の蔭と詠むことが多い。『後撰集』三七四、『貫之集』七一・七八二など。松だけでなく、木のかげといえは、多くは同じ意である(古今集九六六など)。「庇オホフ、ヒサシ、カケ、タスク、カクス」(名義抄)の意を添えて用いるのである。

「うつろふ」は、変色の意にも、散る意にもとれるが、散るの方が直接的で、対比としてはよいであろう。「うつろふ花」は、今現に散っていると考えてもよいが、また、うつろう定めの花、どうせ散ってしまう花の意とも解しうる。

「よそに見る」は、自分と無関係のものとして見る、の意。「秋といへばよそにぞ聞きしあだ人の我をふる名にこそありけれ」(古今集、恋五、824)「みなかみにいのるかひなく涙川うきても人をよそにみるかな」(後撰集、恋一、586)など。単に距離だけの場合もあるが、ここは距離と心情と両方を兼ねている。(↓27)

松と花との対比。松樹は貞節・不変であり、花は浮薄・不定である。「八千草の花はうつろふときはなる松のさ枝を我はむすばな」(万葉集四五〇一家持)「定めなくあだにちりぬる花よりもときはの松の色をやは見ぬ」(後撰集、恋一、不知)「咲きにほふ花をばおきてとよをみこ松にはみまず色なかりけり」(天慶六年日本紀竟宴和歌、聖徳太子、藤原師尹)などは、花よりも松を是とする歌である。また、この比較には『論語』の「歳寒」の観念もあろう。43参照。

この歌は、ただ松の蔭に坐って花を見たというだけの意ではなく、寓意が存するであろう。松のかげとは、これかれの者たちの庇護者をさし、そのおかげで、自分たちは、花のごとく散る(零落の)悲しみからは無関係でいられて、有り難いことだという、感謝の意をこめた歌であろう。たとえば、次のような場合も同じ。「人のもとにまかりて、これ

かれ松の蔭におりて遊び侍り 貫之 蔭にとて立ちかくるれば唐衣ぬれぬ雨ふる松の声かな」(新古今集、雑中)この歌は、『貫之集』によれば、藤原兼輔の邸での詠であり、貫之が兼輔に庇護を求めていることからして、「蔭にとて立ちかくる」とは、人事を含んだ表現である。坂上是則たちも、松の下で酒など飲んでいたかと思われるが、そのような場で、庇護者(あるいは上級者)に対して、下位の者として、謝意をあらわした挨拶でもある。

## 藤原雅正

43 花の色はちらぬま許ふるさにつねには松のみどりなりけり

花のきれいな色は散らない間だけのこと、古里でいつも待ち続けてくれる、変ることのない松の緑の方がすばらしいことでした。

『古今六帖』(第六、松)に貫之の作とする。『貫之集』(1386)に「天慶三年四月右大将殿御屏風の歌廿首」として、その一首に「ふるさとにいたれり」の題で採られている。その四句「つねにも松ぞ」。

『貫之集』のこの屏風歌の部分は、三六六から始まるが、家集の三六六は、『後撰集』春上の44(躬恒)であり、三六七は『兼輔集』(110)『兼盛集』(1195)にもみえており、この三六八も家集にそのまま従うには疑問がある。雅正のために貫之が代作したとも考えられるが、躬恒や兼盛(兼輔は天慶三年には既に死没しており、兼輔とすれば、貫之が兼輔の歌を借用したことになる)が代詠を依頼するとは考えられない。考えられることとしては、編集段階での誤りだが、実は家集は「廿首」としながら、四季二十二首があり、誤入の可能性は強い。家集では「廿首」としてまとめられているので、躬恒のは誤入だが雅正のは代詠

であるというような分離は穏当でない。従って、現段階では43の作者は雅正として不都合はない。

詞書、天福本・二荒山本は何も記さないが、片仮名本・承保奥書本・中院本は「おなじ心を(ヨメル)」とする。このような場合、前歌と同じ場での詠、つまり、是則と雅正とが同座していたとも解釈できるかもしれない。雅正は九〇〇年前後の生れかと思われる(後述)ので、延喜二年(924)生存が知られている是則との同座詠歌はありうる。しかし、『後撰集』で「同じ心を」が、全く別々に詠まれた場合もある(二四八・二四九)。前述の作者の問題もあり、題も特殊ではないので、同座していたとは断定しない方が無難であろう。

花と松との対比は42に既述。古里の花としては、『古今集』春上の

人はいさ心もしらずふるさは花ぞ昔の香に匂ひける(貫之)

ふるさとなりしならの都にも色は変らず花はさきけり(奈良帝)  
 が有名で、ともに花の不変なるを詠んでいる。ところが43は、「ちらぬまばかり」の美しさで、結局は「花の色はただひとさかりけれども」(古今集四五〇)「あなかしまがし花もひととき」(同二〇一六)との見方でもって、花はあだであり、「色は変らず」ではありえないから、ふるさとにあるべきものは、花ではなく「松」待」だとの趣向。

松は貞節不変であり、「待」と掛けて用いられる。『古今集』秋上(二〇〇)「君しのぶ草にやつるふるさは松虫のねぞ悲しかりける」は植物の松ではないが、ふるさとの関係であげた。「ふるさに常に松」とは恋の趣きである。忘れられた女がいつまでも男の訪れを待っているさま。

花は散らぬ間は美しいが、待つことはない、あだな性格である。はなばなと美しい女と、ひたすら男を待つ女と比較して、わが古里でいつも

自分を待っている女の方が本当にはずっとすばらしい女だったのだと、女の待つ古里に来て気付いた、というのがこの歌の情意である。屏風の歌であれば、古里の女を訪れた男の心情として詠んだものである。「歳寒、然後知松柏之後彫也」(論語、子罕)の趣きである。

作者、藤原雅正は中納言兼輔の一男。母不明。兼輔二十歳頃の生れとすれば延喜初頃の生れ(延喜元年兼輔二三歳)。藤原定方女と結婚し、為時(紫式部の父)等を生んだ。貫之・伊勢との贈答歌もある。周防・豊前守、刑部大輔などを歴任。従五位下。

紅梅の花を見て みつね

44 紅に色をばかへて梅の花かぞことくにははざりける

紅梅の花を見て

紅にその色を変えていながら、紅梅の花は、香は白梅と別々には匂はないのだなあ。

『躬恒集』(一233)「こうはいをみはへりて」歌同じ。『貫之集』(一366)「人の家にこうはいあり」歌同じ。『古今六帖』(第六、紅梅)も貫之とする。

作者についての不審は43に既述。こども一往は躬恒と考えてよい。

「ことことに」は別々の意。『名義抄』では「死別タガフ、タカヒニ、コトク、ツハクム」「殊異コトニコトナリ、コトクニ」などが、この意にあたるかと考えられるが、訓点資料では「別」をコトコトと訓んでいる(日本国語大辞典)。今、「別」に従って訳した。殊異の字面で、「ことさら違つては」と解してもよい。

「にははざりける」の「けり」は、気付きのけり。色が違うので香も



違うかと思っていたが、そうではなかったのだなあ、そのことを今はじめて知ったという気持。

『標注』は次の歌を掲げる。本歌取りと言ってよい。「梅花香はことく／＼に匂はねどうすくこくこそ色はさきけれ」(後拾遺、春上、元輔)「梅花いろことく／＼に見ゆれども匂ひはわかぬ物にぞありける」(月詣集、紅梅白梅にほひことならずといふ事をよめる、賀茂成助)

かれこれまどろしてさけらたうべけるまへに、梅の花に雪のふりかゝりけるを  
つらゆき

45 ふる雪はかつもけなくん梅花ちるにまどはず折てかざむ

あれこれの者がくるま座になって酒などいただいた所の前で、梅の花に雪が降りかかったのを、

降ってくる雪は、降る一方ではすぐに消えてほしい。雪を花が散っているのかと見まちがえて、心が混乱するというようなことなく、梅の花を手折って挿頭そう。

「まどろ」は円居。形式に拘わらない宴集。「思ふどちまどろせる夜は唐錦たたまく惜しき物にぞありける」(古今集、雑上、不知)

「さけら」の「ら」は接尾語。「酒ら」の例は五〇・一〇八二にもあるが、「酒たうべ」(一八二など)・「酒らたうべ」(一八二など)・「酒などたうべ」(一六六)・「酒らなどたうべ」(一〇八二)などの「ら」の有無で具体的にどう異なるのであろうか。「物ら言ふ」の用法もある(古今集六一六など)。

降る雪がかつ消ゆということ、「降る雪はかつぞ消ぬらし足引の山の瀧つ瀬声まさるなり」(古今六帖、第六、雪)など。平安後期には「かつ

降る雪」が一つの歌語として用いられている。

雪と花との見立は既述した(↓2)。梅の花が白雪と見紛うという歌は『万葉集』以来の見立で、『古今集』にも三三四～三三七がそのことを主題としている。梅の花と雪と見紛うので、まどわされずに折り取ってかざすべく、降る雪は降るそばから消えてほしい、という大意はよく分るのだが、「ちるにまどはず」とは具体的にどういうことであろう。

『抄』は「ふる雪は且々きえよ。ふれば落梅にまがひて折がたければ、消えたらんにまどはず折かざさんと也」とし、『新抄』も「ふる雪は、ふりく、かたへより消えよかし。さては、梅の花のちるにまがはずして、咲てある事をたしかに見て、折てかざさんとなり」とする。『抄』

『新抄』を更に補えば、降ってくる雪を、梅の花の散るのと見まがえて、既に梅は散りつつあるかと誤解して、かざしに折ることをあきらめてしまふから、散りつつあるのだと見まがうて、心を迷わすことのないように、降る雪はかつ消えてほしい、との意であろう。

「まどろ」は「心あてに折らばや折らむ初霜のおきまどはせる白菊の花」(古今集、秋下、二七七、朝恒)に拠る。心迷う、の意。

二荒山本・片仮名本・堀河本・承保奥書本は「さらにまどはず(で)」とあり、少しも混乱することなく、の意となる。この方が意はよく通るように思われる。

兼輔朝臣のねやのまへに紅梅をうへて侍けるを、三とせ許のち、花さきなどしけるを、女どもその枝をりて、すのうちより、これはいかゞ、といひいだして侍ければ

46 春ごとにさきまさるべき花なればことしをもまだあかずとぞ見る  
はじめて宰相になりて侍ける年になん

兼輔朝臣が寝殿の前に紅梅を植えたのですが、三年ほどの後、花が咲いたりなどしたのですが、女房たちがその枝を折って、簾の中から、これはどうやらんになりますか、と言って差ししましたので

春々ごとにますます目に咲くはずの花です、今年の花をも（勿論みごとではありませんが）まだ満足できないと見ています。

兼輔がはじめて宰相になりました年だったのです。

『貫之集』（1687）「藤原のかねすけの中將、さいさうになりて、よろこびにいたりたるに、はじめてさいたる紅梅おりて、ことしなんさきはじめてる、といひいだしたるに」歌同じ。

『貫之集』の詞書の方が歌意をとりやすい。「よろこびに到りたる」の語も歌の賀意を理解するうえで、直接的助けとなる。『後撰集』は、左注によつてはじめて歌の真に言わんとする所がどこにあるかが分かるのであつて、詞書としては、適切な書き方ではない。この詞書・左注の語り口は、歌物語のそれである。『大和物語』四・三六・一三八段などの左注（歌後文）の役割と同じ。簾の下から梅の枝を出して問いかけるのは、『伊勢物語』百段の、忘れ草を出す話などの例があるかもしれない。『貫之集』では、枝を出したのは、兼輔本人であると見える。『後撰集』では、女房が差し出したのであり、その段階では、まだ宰相昇任のことは読者に全く知らされていないので、梅の花をいかがみると言え、読者は恋歌めかした返答を期待するであろう（紫式部のすきものやりとりや清少納言の大庖嶺の梅も殿上人の期待はそこにあつたのである）——いづれも後代の例であるが）。ところが、貫之にしては意外にあつさりした歌で、「などかくしもよむ」と尋ねたいほどである。そこで、左注で詠歌の真の意図を種明ししてみせたのである。これで、なる

ほどど納得できる。しかし、歌集の詞書としては尋常の書様ではない。この集が物語的であるとされる所以である。

詞書、二荒山・片仮名本・堀河本・承保奥書本では「紅梅をうゑてふたとせばかりはなもさかでかるゝやうにて侍けるがみとせばかりありて」とより具体的であるが、二年・三年ということは、歌意には直接の影響はない。なお、この紅梅をうゑることは、17に似た状況の詞書がある。しかし、同じ梅ではあるまい。「ねや」は寝殿。「寝殿和名称夜、方言腰云与止乃寝室也」（倭名抄）

官職の昇進を花が咲くということ。『後撰集』雜一（二〇七八）「紀友則まだ官たまはらざりける時、ことのついで侍て、年はいくらばかりにかなりぬると問ひ侍ければ、四十余になんなりぬると申ければ、贈太政大臣（時平） 今までになどは花のさかずしてよとせあまり年ぎりはする」や、『大和物語』一二〇段、仲平任大臣の祝に忠平の歌「遅くとくつひには咲ける梅の花たが植ゑおきし種にかあるらん」また、為時の「遅れても咲くべき花は咲きにけり身をかぎりとも思ひけるかな」（後拾遺集、春下）など。

兼輔の任宰相（参議）は延喜二十一年（921）正月三十日である。この時貫之は美濃介（延喜十八年任）である。貫之は兼輔を頼むところがあつたので、さっそくお祝いに çık かけて来たのである。貫之の立場としては当然のことながら、またその歌には如才なさもよくあらわれている。